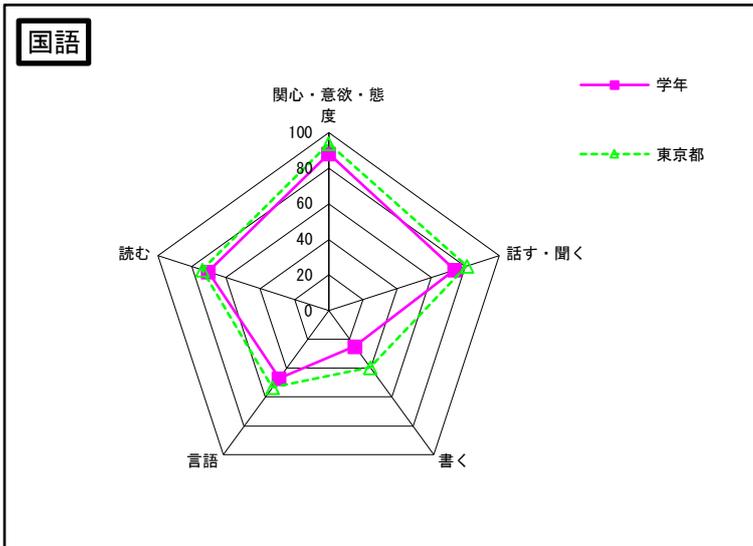


平成 30 年度 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」

(5年 都学力調査)

A 教科の内容



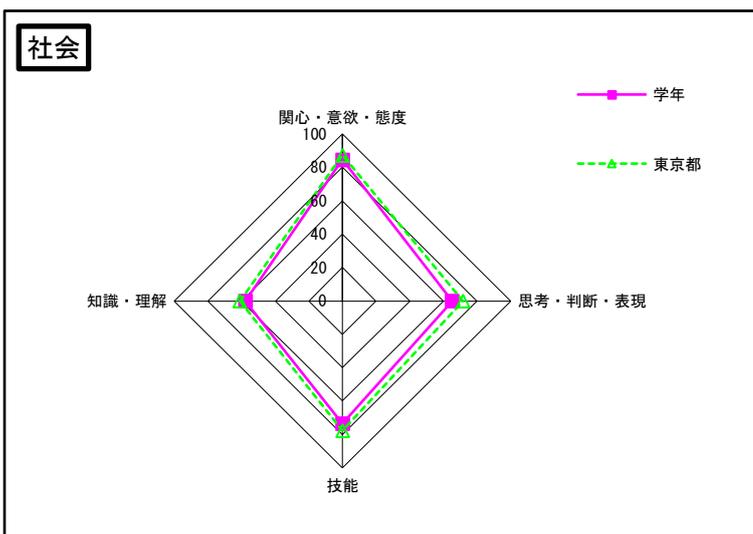
正答率が都平均よりも特に下回ったのは「書く」の分野であった。特に、書きたいことがわかりやすく伝わるように、よりよい表現に書き直すことについて課題があった。

〈授業改善のポイント〉

○相手や目的に応じて書きたいことが伝わるように書く指導の充実を図る。

相手や目的に応じて、根拠の示し方を工夫し、自分の主張に説得力をもたせて書くという言語活動を行う際は、「読むこと」との関連を図ることが重要である。例えば、本や文章などから必要な語

句や文を引用したり、図表やグラフ、絵や写真等と関連付けたりして、資料に示された事実に自分なりの理由付けをして根拠を挙げる等が考えられる。このように、読むことを通して学んだ説得力をもたせる表現の仕方を思い出して書くことができるように指導の工夫を図ることが大切である。



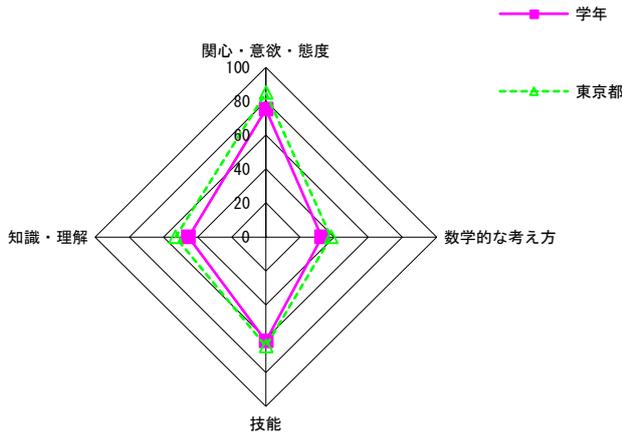
正答率が都平均よりも特に下回ったのは「思考・判断・表現」「技能」の分野であった。

〈授業改善のポイント〉

○児童が見学などで調べてきたことを整理し、目的と手段や、原因と結果などの関係について発問し、社会的事象の特色や相互の関連、社会的事象の意味について考えさせることが大切である。

○技能については、東京ベーシック・ドリルを活用したり必要な情報を正確に読み取る活動を繰り返し取り入れたりすることが重要である。

算数



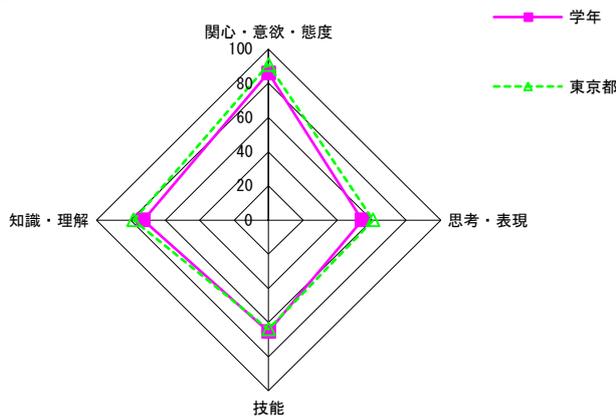
正答率が都平均よりも特に下回ったのは「関心・意欲・態度」の分野であった。

〈授業改善のポイント〉

○自ら問題を解決し、対話の中で広げ、深める指導の充実を図る。

対話的な学習の中で発表された考えについて「他の場合でも使えますか。」や「～さんの考えを、～という言葉を使って説明しましょう。」の発問することで、自分の考えを確かめたり、数学的な表現を使って論理的に説明したりしようとする態度が身に付いていく。

理科



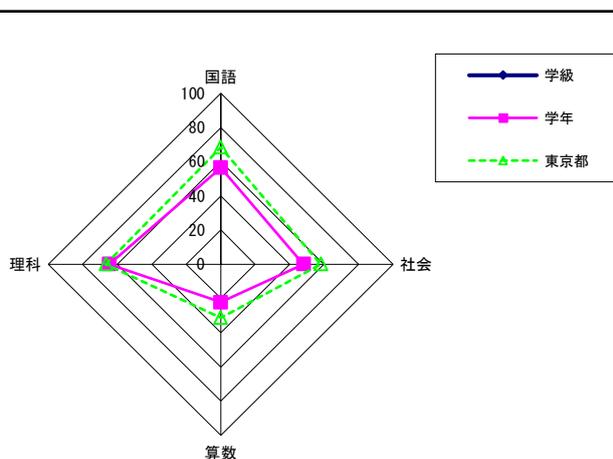
正答率が都平均よりも特に下回ったのは「思考・判断・表現」の分野であった。

〈授業改善のポイント〉

○観察・実験の結果をグラフや表にまとめ、それらを基に考察して、根拠を示しながら自分の考えを説明する学習場面を設定する。

科学的な思考力・表現力を養うためには、観察・実験の結果をまとめたグラフや表から、全体の傾向を捉えて考察するとともに、児童に考えを説明させる学習活動を充実させることが大切である。

B 読み解く力に関する内容



各教科、各観点ともに、東京都の平均値を下回る結果となった。また、国語では取り出す力、社会及び算数では解決する力、理科では読み取る力が、著しく下回る結果となった。

〈授業改善のポイント〉

○各教科の指導において、目標を明確にさせた上で、文章や図表などから、その内容を丁寧に読み取らせ、中心的な内容と付加的な情報に分けさせたり、取り出させたりするなどの指導の充実を図ることが大切である。